

学館斗争覚悟

一、プロローグ

六・三月の学館解放一周年集会以降、我々は学館解放力斗争に取り組み始めたのだが、その過程に於いて明らかになった我々の不十分性、諸向題を覚悟し、今後の斗争の課題としてまとめた。

二、前期斗争の覚悟

この斗争は、本来的には、学館を使用する諸サークル活動の発展として、サークルが担うべき斗争である。しかしながら、サークル活動が、一般的に言われるサークル活動の混沌と停滞「サロン化」肉體性の域を脱し得ず、また現状を上掲する意向がなされまいると言ひ難い状況にあるため、学館特別委員会からの解放一周年集会の呼びかけに対する反応も奇異であった。我々教研も教員と「教育」サークル論再論という課題を掲げているのだが、その活動が和泉中心であったため、学館向題については何の提意も得られなかった。それ故、特別委員の呼びかけに対しては、神田地区の部室が他サークルに同借りしている状態とし、学館は創造活動を行う学生の間であるのに依然としてロックアウトされたまま、また解放一周年は「ならぬ」といって対応しか出来なかつたのである。しかしながら、斗争の過程その内部討論によつて、学館の位置付け一殊外された学生の収容所としての学館を否定し、創造的活動を行つて、殊外状況を止揚すべく、学内学外権力斗争主体を形成するべく、学館がなされた。

三、今度の学館斗争の向題

また、学館斗争の価値付けとしては、(一)内訳再編が進行するなかで、教育分野において中教審路線を基軸として再編が推進され、明治におりても、権力と迎合し学内秩序管理体制の強化といつた再編の先取り自主規制が行われ、その一つとしてある学館ロックアウトに対する攻撃テーマあることが確認されている。そしてまた、我々教研活動との関連性として、教研の課題を正しく見きつ

諸戦線サークルとの共闘によつて、個別戦線サークルの内包する向題を共有し運動を展開するのから解決し、より強固な内部結合、外部との連帯というサークルの具体的な展開に他ならぬ。しかし、この点については、徹底的な討議普遍化が不十分だったようである。三、今度の学館斗争の向題

一、これまで簡単に前期斗争の覚悟をテーマに

が、再びプロローグアウトされて、学館の解放斗争をどうしようとする向題をあげてみた。前期斗争が学館解放後の具体的な管理運営活動内容についての討議がなされず物取りの斗争の面が強かつたが故に、この点について明確な方針を出す必要があった。この点について活動内容は、サークルのより一層の普遍化作業が課題としてある。学館の管理運営の形態を教研として早急に提示する必要がある。また、学館斗争を担う者の刷新が一向題としてある。学館斗争においては、大新斗争の刷新化が求められ、諸戦線サークル以外の学生の刷新化が両斗争において未だ不十分である。単なる運動体制の刷新斗争を乗り越えた意味での学館斗争戦線の構築が要求される。

二、エピソード

(一)内訳再編への状況が進むなかで、我々は学館を我々学生の矛盾を止揚するべく、我々の場、解放区(向けた斗争)を組んでいかねばならない。そしてまた、この斗争をどうやって教研の史的課題の一つであるサークル解放の意向をサークルでの具体的な普遍化作業としていかねばならない。